

令和6年度卒業研究発表会の巻頭にあたって

成田 紗由美 (筑波大学 生物学類 4年)

大学生生活の集大成ともいえる卒業研究発表会に際し、これまでの学生生活を振り返ってみます。

入学式の日、桜を濡らす雨は、まるで大学生生活への期待に影を落とす新型コロナウイルスの流行による不安や諦観を表しているようにみえました。入学以前からコロナ禍を経験していた私たちの胸中には、「きっと思い描くキャンパスライフはもう送れない」「もしかすると学生生活の間ずっと制限され続けるのかもしれない」といった思いがあったのではないのでしょうか。

しかし、桜は毎年咲き、それを見る私たちの心境も徐々に変わることとなりました。それはきっと入学以前には考えてもいなかったような、多くの経験を学生生活の中で送ってきたからこそその変化だと思えます。

生物学類に入ってすぐの私たちを出迎えたのは、基礎生物学実験でした。基礎生物学実験では、初めての実験やレポートに悪戦苦闘しながらも、滅多に会えない学類の仲間と協力し、励ましあって進めることができました。そして、何よりこれまでに教科書で習ってきたことを実際に目で見て、データを取り、整理することで、より深く習得して考察できることにこれまでになく感動していたことを覚えています。また、概論の講義でも、慣れないオンライン授業や課題の量、分厚い教科書に戸惑いつつ、自分の興味のある分野を探しながら、またこれまでに習ってきたことと結び付けながら、歩みを進めていきました。

2年生になるころには新型コロナウイルスによる制限も徐々に解除されていき、対面授業は増えていきました。毎日のように顔を合わせるうちに、交流の幅は広がり、より多くの生物学類の仲間と関わっていくことができたように思います。また、生物学類生にとって語らなくてはならないのが、専門の実験・実習です。菅平高原実験所や下田臨海実験センター、筑波キャンパスの自然に囲まれて調査を行ったり、時間を忘れて生物の観察に夢中になったりしたことは後にも先にもない貴重な経験となりました。

季節は巡り2025年2月18日、いよいよ春立つとき、私たちは卒業研究発表会を迎えます。私たちはこの1年間、各分野の最先端研究を目の当たりにし、その初めの一步を体験してきました。研究室に所属してからの日々はこれまでと大きく変わり、研究が中心の生活となりました。調査や実験を行い、失敗しては悩み、カラオケで歌って発散し、先生方や先輩方に背中を押される…この1年間、何度これを繰り返したかわかりません。しかし、最終的には、得られた成果にまた心が突き動かされることとなりました。

生き物や生物学に触れ、感動し、悩みながらまた感動したこの日々はきっとこれからの礎となると信じています。そうした意味で、この卒業研究発表会は「集大成」にして「通過点」なのだと思います。

そして、この卒業研究発表会は日々指導して下さる先生方や先輩方、学生生活についてあらゆる支援をして下さる生命環境エリア支援室や学類長室の職員の方々、準備・運営をして下さったり聴講して盛り上げてくれて下さったりする1~3年生の方々なしには成り立ちません。卒業研究や発表会に関わる全ての方々にこの場を借りて御礼申し上げます。

改めて振り返ると、生物学類生に助けられ、支えられてきた思い出が数多く蘇ってきました。多様な生物学類生の多様な研究が集う発表会、各々の思いや感動、情熱を胸に、臨んでいきましょう。

Communicated by Yoshihisa Hirakawa, Received January 16, 2025.